
Changing the Future

未来を変える僕の物語

扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Changing the Future 未来を変える僕の物語

【Nコード】

N9262W

【作者名】

扉。

【あらすじ】

世の中には死期がある。
そう、この世では決められたルール。
それを壊された少年は運命に逆らい
過去へ飛んだ。そこで彼が見てしまった
あの時の自分が見なかった真実とは？

タイトル変更

2011 10/8

僕、死ぬらしいです（前書き）

この作品は、ちょっと面白い気がします。

ぜひ、感想等をください。

僕、死ぬらしいです

高校2年生になったある日。

僕は休日なのだから、もつと寝かしてくれと……妹に言いつけ自分のベッドへもぐりこむ。

その際に鍵を掛けるのを忘れずにね。

「……なさい」

「……きなさい」

ああ、うつせえな……あ、後、5分。

「起きろって、言ってるでしょうがあああああああ！……！！」

「うおお！？ あぶねえな」

突然ハンマーらしき物に踏み潰させるところだった。

「そ、それでいいのよ。まったく、最近の子どもは教育が成ってないわね」

ブツブツと言いだめた少女。

あれ……ここ、何処だ？

見渡す限りの白い空間、雲の上にも思えるし、天国にも……

天国!?

ま、まさか・・・

「あ……のおくつかぬ事をお伺いしますがあ……」

「はい、なんでしょうか?」

「ここって、もしかして天国的な? 違いますよねえ あはは、変な事言ってますね」

「いや、天国ですけど!?!」

……………。

あ、わかったぞ、これは夢だ。

きっとそうだ、Dreamだわ、気のせいだ早く寝よつと。

おやすみなさ いたたたああああ

「勝手に寝ないで頂戴」

「え、痛いつてことは僕死んだの?」

つねられた頬をさすりながら冷静に理解する。

「いえ、自失的には死んではないわ。今は」

なんだ、死んでないのか。今はよかった。

……………

「……って、僕死ぬのか!? いつ? 何時? 何分?」

「あーもう、うっさいわね。3日後よ、3日後」

ああ、僕3日後に死ぬんだ。

嫌だな。出来れば痛い思いをして死にたくないけどなあ……

「何が原因で死ぬんだ？」

「それは私が誤ってアナタの生存身文書を燃やしてしまったからよ」

……

すると少女は『し、しまった』と言わんばかりの顔をした。

「てめえのせいで僕は死ぬのかよおおお」

「いたい、いたいれふう」

少女の頬をうりうりと攻撃する。

5分後

「で、僕はどうしてここに呼ばれたんだ？」

「それはですね！」

と言って、少女が1枚の用紙を渡してきた。

「私が、アナタの生存身文書を燃やしてしまったのには原因があります」

「まあ、僕の事が嫌いで燃やした以外ならあるだろうな」

「その紙に書かれていることを、行えばアナタの死は免れます」

「予知しろと？」

「これは私が原因ではなく元々アナタは3日後の午前A m 0 0 : 0
0に死ぬはずだったのです」

はぁ・・・とため息を付き、少女の話を聞く。

「それが私の不ちゆ いたいれふう」

「ドヤ顔で言うな」

頬をヒリヒリさせている少女は続けるように話をした。

「ではアナタには一度、3日後に死んでもらいます。その後、再び
ここへ来て

今度は過去へ飛んでもらいます。そこで改変を起こすのです」
グツとガッツポーズを決め、参ったかと言わんばかりの顔。

「過去を変えて未来を変えると・・・」

「そうです、アナタは意外と頭がいいようですね」
意外は余計だ。

「でも、過去つて変えてもそれ通りになるとは限らねえだろ？」

「ええ、そうですね。アナタが過去を改変したら、妹さんがいなく
なったり

兄妹が増えたり、知り合いが消えていたり e t c …」

まぁ・・・そんなことは起きないだろうけどさ。

「わかった、よくわかったよ」

「ほんとですか！ なら、さっそく」

「でも、1ついいか？」

「はい？ 为什么呢しょうか？」

「何でお前はそんな事を僕に言うんだ？」

すると、少女はふふふと女の子らしい笑い方をした後、手から光をだし

「それはですね、私がおなた」

最後まで言葉を聞くことなく、僕は夢の世界を追い出されてしまった。

目を覚ますと、妹がベッドの中に……ってか、横で寝ていた。キレイな顔立ちに、プニプニとした頬、くりっとした目。前髪はパツンで黒い髪、大きくもなく小さくもない胸

そしてなによりいいいいいい

僕は説明の途中で、ベッドを飛び出した。

「……ん……あ……」

妹はまだ寝ているようだ。

ってか、寝息がなんかえろい。

危ない、危ない。

な……なぜ、妹は

服を着ていないのだろうか。

落ち着け 落ち着け僕。

体の細胞を最高値まで上げ、普段使われていない脳の約8割をフルに使うんだ。

昨日、何があった？

つてか、さつきまで起きていた感じがするのは気のせいかな？

何も思い出せない。

話がそれってしまった。

何故、妹が僕の部屋それも僕が今まで寝ていたベッドの中で全裸で寝ていたと言う事だ。

つてか、つい数時間前に部屋に鍵かけたはずなんだけどなあれは夢だったのか？

そう思った矢先、妹は布団の中でもそもそつとした。

「これはいち早く退散しないと……」

そう思い入口の扉を開けるが！？

可笑しい、これは外から閉めるタイプじゃないのに開かない。

押しても 引いても 上げても 下げても 一向に変わらない。

ヤバい ヤバい

ヤバい ヤバい。

ヤバくない。

逃げられない。

選択肢

1 窓から飛び降りる

いや、ムリだ。高い所ニガテだし

2 妹が起きるのを待つ

これも不可 まじ僕の部屋で寝ていること自体聞きたい

3 妹と隣り合わせで寝る。

………ま、まて今シスコンって思った奴
変態って思った奴 言うておこらう。

僕は変態でもシスコンでもない 変態と言う名の紳士だ！！

嘘です。

ただの普通の人です。

人並に妹が心配で大切にそんな感じですよ。

3もないとして、どうする？

【作者】

考えるだけ時間が過ぎ 考えるだけ時が減っていく。

さあ はたして 主人公の結末はいかに!?

えっ!?! ちょっと待って。

僕、主人公だったの？

初耳なんですけど。

それに次回に引っ張るってめんどくさすぎるにもほどがあるでしょ。

ねえ、作者 おい作者 まt

T o B e C o n t i n u e

残り25・00・00秒とちょっと(前書き)

速めに書けたのでどうぞ!!

感想待ってます

残り25、00、00秒とちょっと

え……っつと作者さん？

タイトルがあれなんですけど？

まあ、深くは追及しません。

したら負けだと思ってます。

前回の事を簡単に説明すると

服を着ていない妹vs逃げる兄らしいです。

ってか、どんな場合じゃない。

どうしよう………。

あ！ 閃かない………。

「にゃ………」

ビクッとなった僕。

ビビった起きたのかと思った。

ただの寝言でした。寝言が猫の鳴き声だったのが不明だけど。

「まあ、こうなったら覚悟して部屋の隅で寝るしかないね」

僕はそう言っつて、ベッドから比較的遠い場所へ移動し、目を閉じた。

「なんだ君は!!」
突然怒られた。

「なんだって何が?」

「せっかく私が部屋の鍵を開けておいて、妹ちゃんが侵入しやすいようにしたり

鍵を外側から掛けたりという

あだう」

「やっぱし 안타か」

「うううう、痛い」

僕は少女にチヨップをし、終始怒りにまみれていた。

「だからって妹の服をぬ『あれは妹ちゃんの意味だ』へ?」
・・・ぽかーんと口を開ける。

「はあああ、何故に?」

「いや、私に聞かれても困るよ。妹ちゃんは君になら全てを捧げられるってことなんじゃないかな?」

「いや疑問形の質問を疑問形で返されても・・・」

「そうだねえ」

そういつて少女は腕を組んだ。

良く見ると、胸はなくまな板のよう。

顔は背景が光っていて見えない。

羽も生えているし、真っ白い服も着ている。

これぞまさに、神聖な天使

「む? 今、卑猥な事と褒め言葉が聞こえたような・・・」
「き、気のせいじゃないかな。あは、あははは」

笑ってごまかした。
危ない 危ない。

「で、話は変わるけどこのタイトル25、000、000ってどういう意味？」

「ああ、それはな1分は60秒 1時間は3600秒 1日は86、400 3日で」

「25、000、000と……」

「そういうこと」

「他にもあるんだけど。僕がもし死んで」

「いや死ぬのは確定だけだね」

「わかっている。死んで、過去へ行って改変した世界にいる僕は僕なのか？」

すると少女はうーんと悩みだした。

「まあ、簡単に言うと過去へ行った事は変わらないから改変した未来には君しかない。

他の君はいないというわけさ」

「……………よくわからないけど、まあわかった」

「じゃあ、君を返すけど他に質問は？」

いつから、質問コーナーになったのだろうか……。

「僕は過去へ行っても過去の自分とは会うのかい？」

「……………それは自分次第だ。過去の自分へ会っても君は過去へ行くと言う選択肢を選ぶ。それはもう決まっているのだよ。」

そうか、ありがとう。

僕はそうお礼をいいこの場を去った。

「おにい……ちゃん……」

はあ……またここからかよ。

横には妹がスヤスヤと寝ている。

思ったら妹の体を見ずに妹を起こせばいんじゃねえか！

僕って頭いい！

「おい、おきろー」

ユサユサと揺らすと妹は半目で僕を見る。

「……どなたですか？」

「お前の兄貴だよ」

「……はっ！！ 忘れてた。お兄ちゃんのベッドへ侵入したはいいものあまりに

いい匂いで暖かったから寝ちゃってました」

いい匂いとかいうなよ。なんかこっぱずかしいだろ。

「その前に服を着る、着て、着てください」

「……お兄ちゃん、見た？ 興奮した？」

「ふっ 誰か妹の裸見て興奮するんだよ」

すみません、実はちょっと考えちゃいました。

「……あう……やっぱりこの幼児体型がいけなんだあ」

ブツブツと誰かに言っている。
誰だよ、こええよ!!

「まあ、それはいいと服を着ろ」

「うん、じゃあね、また後で」

そういつて妹は僕の布団を巻きピユーツと部屋を出た。

普通にドア開いたな。

結局、僕の休み（日曜日）は平凡に終わったと言っはずもなく
ただあの少女の言葉だけが頭の中を駆け巡る。

次の日学校。

といつても今日は先生達の講習会見たいな物で午前授業で終わった。

残り 12 / 50 . 00 秒

残り2日。

結局なにで死ぬのかいまだ不明だ。

何故、自分の死期を知っているのか不安になってくる。

悲しくなってくる。

僕は後2日でこの世からいなくなる。

もし戻ってきたら、こんな風に学校生活を学んでみたい。

放課後

とくに訳もなく家に帰った。

そして後2日という人生の最後にするだけでも考えていた。

色々あったが、最後に思ったことは……………

僕、誰とも付き合ったことねえ。

と言っ点。

まあ、特に恋愛感情もなかったし、いんだけどね。

【作者】

さて、今回はこの辺にして次回は2日目！！
頑張りましょう、主人公！！

そしていまだに名前が誰1人して出てこない！！

それは作者の考える名前が全員ダサいから!!

また、そんな閉めかたで終わるのかよ。

「閉店ガラガラ、でたっ!!」

.....。

T O B e C o n t i n u e

残り25'00'00秒とちょっと(後書き)

感想待ってます

Love Call (前書き)

この作品を見ている読者様
いつもありがとうございます。

今回は、読者様に決めて欲し事があります。

次の次の編で使われるキャラの名前が決まらないのです!!
どうか、どうか案を出しますので投票してください。
お願いします。

- 1 青音せいね 奏かなで
あおばやし
- 2 青林あおばやし 天弦あまいと
あかむら
- 3 朱村あかむら 琴音ことね

の3候補です。

どうか、投票お願いします。

こなければ、この案は没と言う可能性も大ですので…

感想待ってます。

ここ直した方がいいんじゃないかって所あったらお願いします。

Love Call

残り86,400秒

と、言っても正確には恐らく80000秒も無いんだろうな。
そう、今日で僕は死にます。

そう思いながら、学校へ足を運ぶ。
最後と分かっているもどうしても来てしまう。
最後の別れだと信じたくないから……

僕には大が付くほどの親友がいる。
そいつは病弱で体が弱く、たまに学校を休むことも多々あるが
僕はそいつを大親友と認めている。
そいつもまた僕の事を大親友と認めていてほしい。

僕が教室へ入ると……

「やあ、おはよう」

その親友からの挨拶だ。

「おはよ、今日は来たのか、何日振りだ？」

「いやだなあ、昨日いたじゃないか。気づいてなかったのかい？」

……あれ、昨日見たっけ？

その記憶さえ曖昧になっている。

「でも上の空みたいな感じだったから、覚えてなくてもしょうがな

いけどね」
死ぬって先刻させてますからね。

「そうだったか？ それはゴメンな」
「うん、君と僕で多少そんなことがあって話す機会があるからだ
と思うよ。」

そうか・・・、僕は。
コイツと話せなくなるかもしれないのか。

「で、どうしたんだい？昨日は」
「……んあ！？ いや、特にないさ」
「そうそれならいいけど、何かあったら僕に相談してよね」
「うん、そうするよ」

もし、過去の僕が現在のコイツに会っていたら現在の僕の居場所は
なくなってしまう。
過去の僕がそうしないとは思って、過去のコイツはきっと理解して
くれるだろうか？

「そっだー!!」
「うお！？ どうしたいきなり。」
いきなり声を上げたもんだから驚いてしまった。

「今日の放課後開いてる？」
「ん・・・まあ」
今日、死ぬことは確定積みだ。
それも12時と言っていた。

ということとは、後、14、5時間後と言う事になる。

「そう、それなら放課後、屋上に来てくれるかな」

「わかった。お前の頼みだからな」

「おい席に座れ。」

そして、僕は最後の学校となった。

授業中、僕は何気なくノートを破り大親友のプロフィール的な物を書いてみた。

遊倉ゆぐら カオル

年齢は16

身長は165前後

性別は、よくわからない。

よくわからないと言うのは勝手だが、実は本当によくわからないのだ。

男子用の制服を着ていることから男子ではあるが、なんせ養子が女の子過ぎる。

長い茶色の髪に綺麗に整った顔立ち、右目は完全に髪で隠れており、声帯も女の子ぽく高い。なんせ、親友と言って言う僕でさえ、ふいに話しかけられると

ドキッと切れしまうほどの美少女・・・うん。美少女ってことにし

ておこう。

性格は温厚で人当たりがよく、色々な人に指示を受けている。男子にも女子にも告白された経験があると言っていたし、これはもうどっちでもいいな。

僕は、一通りのプロフィールを書き、最後にカオルの横顔を書いてノートを閉じた。

そして数分後、授業終了のチャイムが鳴った。

昼休み、僕はカオルの近くの席へ移動をし、お弁当を開く。

「毎度、毎度、妹さんには感心するね」

「まあ・・・アイツの特技って・・・これだけ・・・だしな」
妹の作ってくれた弁当をむしゃむしゃと食べる。
ちなみにカオルはサンドイッチである。

「それにしても放課後何かあるのか？」

「ん……ああ、ちよつとね。」
にや笑いをしてその場をごまかす。

「まあ、いいけどな」

どうせ今日でお前とも……。

「なあ、カオル」

「なんだい？」

「もし僕が居なくなったらお前は どうする？」

カオルは両手を合わせ考える。

「やっぱり悲しいよ、なんせ大親友だもん」

よかった。そうおもっていてくれて。

「でもなんでそんなこと聞いたの？」

「い、いやなんでもない。ただの知的好奇心だよ」

ふと、カオルの腕を見ると、少し包帯で巻いている。

「お前この腕どうしたんだ？」

「ああ、これはね。ちよつと擦りむいてさ、ちよつと余計なだけで医者かねえ……」

へえ、そうなんだ。

僕は弁当を平らげて、席を立つ。

「じゃあ、放課後な。覚えておくよ」

「うん、よろしくね。」

僕は、その『よろしくね』が僕に向けられて言われているのだと思
った。

しかし、運命と言う物 奇跡というものはある日突然やってくる。

「好きです。アナタの事が、ずっと、ずっと、ずっと前から」

放課後、屋上で風が吹く中、彼女は僕にそう言ってきた。

しばらくの沈黙。

「え……あの……」

カオルに呼び出されていざ屋上へ向かった途端だ。
扉を開けたら目の前に女の子が立っていて今に陥る。

「……」

「あ……」

僕は彼女を直視できずに目をそらす。

彼女はモジモジと僕の答えを待っている。

「こんな僕を好きでいてくれることは嬉しいよ」
すると、彼女の表情は一気にはれ明るくなった。

でも、僕は明日にはいない。

過去へ飛び、未来を変えなくちゃ、君は悲しんでしまう。

僕はもう、人の悲しむ姿を見たくない。

「でも……、僕はもういなくなる。君達の心の中からも」

「……」

彼女は理解が出来ないのか、呆然と立っていた。

「人は死ねば、誰かが悲しむ。しかし、時と時間が過ぎれば人は記憶から人を消す。」

きつと、君は今僕が好きでも明日には別の人が好きになっているのかもしれない」

彼女の表情は段々と暗くなっていき、今にも泣きそうだった。

「最後に言っておくよ。」

僕は彼女の肩を抱き、耳元で呟いた。

「こんな、記憶に残らない僕でよければ喜んで」

彼女はうれし泣きと言う、僕が見たくない涙を流した。

そして僕は後、7時間の命と言う所、生涯で初めて恋人が出来た。

僕はそれから教室へと戻った。

彼女の横を歩きながら。

教室へ行くと、夕焼けに染まるキレイな教室にたたずむ1人の少年？少女？

「あ、戻ってきた」

僕らに気づいたカオルは近づいてくるなり、僕に話しかけてくる。

「で、どうなったの？」

「お前が原因だよ」

「うん、彼女。僕のちょっとした知り合いなんだ。で、彼女が君の事が好きだって

言っていたから今日、告白させたわけっていう事なのさ」

「いや、そんなすがすがしい顔で言われても……」

するとカオルは彼女の方へ行き、ドンツと背中を押す。

「はい、自己紹介！」

「蜜葉 英梨と言います。よろしくお願いします」

「この子はね、いつもは強気だけど、きみ」『ちょっとまってよ』
「ごめん、ごめん」

カオルの説明の途中で蜜葉さんは怒ってポコスカと殴っている。

ああ……和むわあ。

「僕は……言わなくてもいいよね」

そこからはカオルが仕切ってくれた。

もつものは親友ってか、完全に面白がっているような気がするけど。

そんなこんなで僕らは楽しい時間を過ごした。

「そろそろ帰りますか」

「だな」

「そうですね」

すっかり緊張の解けた蜜葉さんは僕に接する時も普通になったらしい。

「じゃあ、僕はこっちだから」

「またね、」

「今日はありがとう」

カオルと蜜葉さんに手を振り僕は別の道へと進んだ。

ここでお別れだね……と呟いて。

そこから先は、トントン拍子。

普通に帰り、妹と戯れ、飯を食べ、風呂に入り、部屋で少し勉強をした。

寝る前に、隣の部屋で寝ている妹の部屋へ。

寝顔を見ると、こんなにも可愛い。

僕はシスコンかもしれない。そう思った。

「僕はお前の兄で本当に良かったよ」

頭を撫でながらいい、部屋を出た。

「僕の命もあと数分。」

最後に携帯でメールを確認。

蜜葉さんからのメール。

「今日は返事をありがとう。また明日学校で会おうね」

・・・すん。あれ、なんでだろう。

僕・・・・・・・・・・泣いてるのか。

頬に流れる涙を拭いて、僕は返信をする。

「こちらこそ。そして、ありがとう」と。

僕は携帯を置き、布団にもぐりこんだ。

そして、死ぬように寝た

いや

眠るように死んだ。

朱林 あはばやし
結弦 ゆづる

享年 16歳

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e

Love Call (後書き)

主人公 死んじゃったよおおお (泣)

そして、最後の最後で名前出てきたよおおお

次回は死んだ後。

感想待ってます。

ようこそ（前書き）

この作品を見ている読者様
いつもありがとうございます。

今回は、読者様に決めて欲し事があります。

次の次の編で使われるキャラの名前が決まらないのです!!
どうか、どうか案を出しますので投票してください。
お願いします。

1 青音 せいね 奏 かなで

2 青林 あおはやし 天弦 あまいと

3 朱村 あかむら 琴音 ことね

の3候補です。

どうか、投票お願いします。

こなければ、この案は没と言う可能性も大ですので…

よつこそ

目を覚ますと、見渡す限りの広い、広い、広い場所だった。ここがああのか・・・と呟くと後ろからツンツンと叩かれた。振り向くと、そこには笑顔で僕を待っていた少女であった。

「どうだった？死んでみての感想は？」

「いい気がしなかったよ、でも・・・」

僕は言うのを途中で止めた。

「まあ、いいさ。君の人生はここから2nd seasonに入るのだよ」

「何そのドヤ顔。元をたどればお前が原因なんだけど」

「いたた、いた、いたいれふう」

僕は少女の頬をつねりながら聞き返す。

「で、僕は何をすればいいんだ？」

「それ！！」

どれだよ！！ とツッコミたくなる衝動を抑え少女の話を聞く。

「まず君には死ぬ2ヶ月前……4月29日に飛んでもらう」

「丁度GWが始まった時だな」

「うむ、そこで私の化身ともいえる者に会ってもらいそいつと協力してある事を解決してくる。」

「ある事？」

「ああ、それを解決しないと、結局君は死ぬ」

う……ん、難しい。

それと

「お前の化身ってどういう事だ？」

「それはな、私はここから動けないわけだから、手伝えない。しかし、化身なら君の手伝いは要領に出来るわけだ。」

「はあ……………」

ただの罪滅ぼしじゃねえだろうな？

「後、1ついいか？」

「ぬ、なんだい？」

「過去に行くってことは過去の僕に会ってことだろ？」

「そうだね、そうなるね」

「もし会ったらどうすればいい？」

「それは殴って記憶を消すしかない。」

……………あ、そういえば。

GWの時、何度か気を失った記憶がある。

これはその時だったのか！

「……………それと」

少女が言う。

「遊倉 カオルをこっち側に付けた方がいい。」

「は！？ カオルを？」

「ああ、あの子は特別だ。協力を頼んではないだろう」

「ということはカオルに『僕は未来から来ました』と言う事なのだろうか？」

「わかった、覚えておくよ」

「うむ、ではそろそろ行くか？」

「まっ……」

「僕の家は僕が使ってるから僕は何処に行けばいいんだ？」

「それは、行ってからのお楽しみって奴だよ。」

そういった少女は指を空に掲げ

「さあ、あひはやし朱林、ゆじる結弦よ。過去を変え、未来に戻ってこい!!」

「ああ、言われなくても」

そういった後、少女は指をパチンツと鳴らした。
その瞬間、僕は気を失った。

5・28日 pm 5:00

目が覚めると、どこかの公園にいた。

時間は……携帯を取ろうとポケットを探るがない。

そうか、過去に来たから同じ携帯があつたら不自然か。

はず初めに、少女の化身とやらを探さないとな。

そう思い、公園から立ち去ろうとすると……声を掛けられた。

1人の少女に。

「む、誰が少女だ!!」

養子が少女にそっくりだった。

こいつが化身って奴か。

「お前、僕のことわかるか？」

「ああ、わかるとも私は天国の私とリンクしているからな
このウザったい喋り方も同じ。」

「お前はこっちで何て呼ばれているんだ？」

「私はない。誰とも関わっていないからな、お前を救う為だけに生
み出された。」

それじゃあ、僕がこの過去から用が無くなったら消えてしまうのか
な。

「君には協力する。それでいいだろう」

「ん ああ」

「なら、私の家へ来い。そこで住むといいぞ」

「え……ちよ……」
僕は抵抗も虚しく少女の家へと引っ張られていった。

少女の家へ着いた。

普通のマンションの一角。

「お前1人で住んでいるのか？」

「さつきも言っただけど私の役目は君の過去を変える作業を手伝う事、
家族は設定にない。」
悲しい。

「なら、僕がお前の家族になるさ」

「……」

「えっ！？ 何で黙ったの。ねえ！？」

少女は顔を赤くしながら部屋を去って行った。
僕、可笑しい事言っただかな？

少しすると戻ってきた。

「よし、今から君に私の名前を考えてもらおう」

「はい！？」

「だって君はか……なんだろ、だつたら名前も考えてもらわないと」

「左様ですか」

そういったはいいものの、僕はまだ人に名前を付けた事はないし、

うーん。

初めて会ったのが、天国？ 天だろ・・・で、

「天・・・翔・・・。そう！ 天翔あまかけってのはどうだ？」

「天翔あまかけか……いい名前だな。」

こうして、少女ならぬ天翔となったのであった。

「で、具体的には僕達はどつするんだ」

時間をおいて、お茶を飲みながら作戦会議。

「そうだな、3日後 5月1日に実はこの街に『悪魔』がやってきていた。」

「・・・今なんと？」

「だから、5月1日に」

「いや、もつと後」

「やってきた？」

「その前、」

「『悪魔』」

「悪魔!？」

何故、そのタイミングで悪魔なんだ？

「といつても、地獄にいるような悪魔ではなく・・・この世で言う怪異的な物だ。」

怪異とは人外、すなわち人ではない物体の事を言う。

例えば、吸血鬼、狼男、など伝説上の話ではあるが怪異はいるらしい。

その中でも悪魔は酷く、今回の悪魔は『願い悪魔』デビルウィッシュと言いたい。願いを叶えた者の死を貰いに来ると言うなんともめんどくさい奴なのであるらしい。

「で、なんでその『願い悪魔』が僕の死に関わるんだ？」

「その悪魔は、直接にはお前に関係はない。しかし、お前の身近やな奴に憑りつくのだ。」

身近って言えば、カオルくらいしか……あ！！

そういえば、蜜葉さんもカオルと仲が良かった。

でも、蜜葉さんはそんな様子はなかったし……。

「そんな奴いないぞ」

「いや、身近にいるもんさ、以外と」

その姿はどこかさびしい表情だった。

夕方になり、夕食の時間になった。

「お前、飯作れるのか？」

「あ、当たり前だ。」

そういつて台所へ立つが……もうぐつちやぐちや。ありとあらゆるものは壊れ、破損している。

「……………お前、料理してことねえだろ」

「…………ふっ そんなことないもん
あ、すねた。」

ぷうと頬を膨らませ、僕を無視する天翔。

もう……と立ち上がり、僕は台所へ立つ。

「おま」

「黙っとけ、」

そういつて僕はテンポよく料理を作っていく、

「御馳走様」

「ごちそうさま」

食べ終わった。

「それにしても料理うまいな」

「いや、ただ手先が器用なだけだよ」

妹の料理と隣で何年見てたと思ってるんだ。

「私は先に食器を洗っておくから、君は風呂にでも入っていてくれ」
「あいよー」

お言葉に甘えて僕は、風呂へ向かった。

「ふうふうふうふう」

風呂に入り一息。

今の僕はこの世界の僕じゃない。
今頃、元いた世界軸のみんなはどうしているだろうか？

きつと泣いてくれているであろう、妹、カオル、そして蜜葉さん。
ありがとう。

そう思ってたなら、ガラガラと風呂のドアが開いた。

「ちょ……おまえ」

「大丈夫だ、前は隠している」

「そういう問題じゃ」

「ここは私の家だ。私がいつ風呂に入っても否定件はない。」

「じゃあ、僕が」

「それも断る。」

そういつて風呂に入ってくる。

狭い、浴室なので体がくっつく。

最終的には、僕の上に天翔が乗っていると言う状態になった。

「こ、これは……」

ヤバい、気が……。

「どうした、君」

「いや、なんでもない」

「そうか……」

そういつてしばらく沈黙。

誰か喋るよー。あ、ここに僕とコイツしかいなかった。

「もう、上がるか」

「いや私はさつき入ったばかりだ。」

「じゃあ、僕が」

「その権利はない。」

「う……」

かれこれ数分。

もう限界かもしれん。

コイツの背中妙にさらさらしている。

足に当たってよく分かる。

白い肌にキレイな髪。

も、もうダメです。

これ以上いると、襲っちゃう。

嘘だけ。

本当に嘘です。

すいません。

と、言う事で少女のいう事を聞かず僕は風呂場を飛び出した。

最後に、ノートにコイツのプロフィールを書く。

天翔

年齢不明

身長148cm

性別 女

養子は可愛いが、出ていてほしい所は出ていない
身長は小さく、150cmもないだろう。
白髪にサラサラとした髪を降ろしている。
少女は僕の為にこの世界へ来てくれた。

結局、寝るところも同じベッド
拒否権はないらしい。

僕はいいけど、お前はどうかんだよ。と言ったら
口パクで何かいい、寝てしまった。

僕は、これからどうなるんだろう。

僕は隣ですやすやす寝ている天翔の寝顔を眺めながら眠りについた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E

ありがとうございます(後書き)

感想待っています。

4月29日(前書き)

2日連続投稿!!

感想お願いします。

4月29日

次の日

朝目覚めると、目の前に白髪の美少女の寝顔があった。

少し驚いたが、理解した。ぼんやりと、

僕は過去に来ていたと・・・

そこからは低血圧の僕は完全に目が覚めるのに1時間以上かかって
しまい天翔に、

酷く怒られた。

最終的には、部屋中を引きずり回され、ようやく目が覚める。

朝食を食べ、いざGW編だ！ と、飛び出した矢先の事である。

僕は、黒のTシャツに白いチェックのパーカー、下は迷彩柄のジー
パンである。

天翔はチェックのスカートにピンクの服を着ている。

「で、始めは何処に行くんだ？」

「そうですね。この時代に必要な事は、『ウィッシュユデビル願い悪魔』を倒すこと
です」

『ウィッシュユデビル願い悪魔』

人の願いを叶え、その代償として肉体を操ると言う怪異。

悪魔ともいえるし、怪異ともいえる。化け物ともいう。

とにかく、人外だ。

「その『願ワッシュユデビルい悪魔』はどこにいるんだ？」

「それは知りません」

・・・へ？

「しかし、心当たりは在ります」

そう言われて、連れてこられたのは神社であった。

「ここにいますのですが・・・」

「もしかして、あれ？」

そういつて僕が指を差した先には

巫女服を着た美少女がいた。

「ああ、あれだ。おい、衣桶」

そういつて天翔は手を振る。

すると、巫女さんは僕に警戒しながらも近づいてきた。

「……………お、お久しぶりです。青村さん」

「青村!？」

「私の苗字です。」

青村かよ!!! ってか、苗字くらいあるなら名前も考えとけ!!!

「久しぶりですね、衣桶」

「……………今日はどういったご用件で？」

首を傾げて聞いてくる。
か、可愛い。

「今日は『願い悪魔』ウイッシュエビルについて」

「その件ですね、先ほども聞いてきた方がいました」
そういつと衣楠と呼ばれた少女はせつせとある資料を渡してきた。

「……こ、これが資料です。」

「うむ、ありがとう」

ぱらぱらと見だす天翔。

その間、僕と少女は目を合わせると互いにや笑いをする。

そして、

「大体はわかったぞ。ありがとう」

「……いえ、お役に立てて……」

「結構、時間経つけどいいか？」

「なんででしょうか？」

「この子誰？」

さわ〜と風が靡く。

「そ、そうだった。紹介をするのを忘れていた。」

「今、素で忘れてただろ」

「そんなわけ この子は仲村なかむら 衣楠いくす。この神社の子どもだ。」

「……仲村 衣楠です。」

深々とお辞儀をする衣楠。

「……………そ、それは」

そこで口を閉ざしてしまった衣楠。

僕は驚きと驚きで道央が止まらない。

初めて、リアルで男の娘と言っのを見た。

ってか、そこいらの女の子より女の子だぞこいつ。

やばい、普通に可愛い!!!

顔を赤らめ、巫女服で顔を隠す衣楠。

「巫女服はな、衣楠の父親の趣味だ」

「趣味!?!」

なんでもお父さんは無類のコスプレマニアらしい。
それでも息子に巫女服着せるか普通。

「……………僕も好きで着ているので大丈夫ですけど」
「いいんだ!!」

もう、納得することになりました。 はい、

そこから、衣楠と少し雑談した後、僕と天翔は神社を後にした。

「それにしても可愛かったな」

「そうですか、男の娘で残念でしたね」

「ほんとだよ、女の子だったら告っていたね」

「そうですかあ」

あははと2人で笑いあう。

「そういえば、死ぬ前に僕、告られたんだよな……」

「たしか、蜜葉 英梨……だったですかね？」

「何で知ってたんだよ」

「そりゃー、君の事なら何でもお見通しですよ」

ニコツと笑う天翔。

その笑顔は今まで見た中で一番だった。

「『ウィッシュユデビル 願い悪魔』の事は解りました。明日は、協力を頼みにいきます」

「協力？ そういえば、天国のお前にカオルを味方に付けろって」

「そうです、遊倉 カオルは大切なキーマンになります。」

グツとガッツポーズを決める天翔。

そういえば、カオルも結構な男の娘だよな……ってかあいつは本当に男なのかすら危うい。

「もう時間も時間だしな」

「そうですね、帰りましょう」

と、言う事で帰ることになりました。

それから昨日と同様、夕飯を僕が作り

風呂に乱入してきて布団も同じと言う。

後、数日で

そんな思いをさせながら僕は今日もコイツの隣で眠りに着く。

同時刻。

「はあ、はあ………」

ここに人影あり。

「こいつ、前より強くなっている」

目の前には左手に包帯を巻いたパーカーを深々と被った者がいた。

「はあ………願い………か………」

そして、人物は何処かを見渡すと風のように去って行った。

「危ない所だった」

腰を下ろした。

そして一言。

「・・・早く来てくれ」

そう、この子の名は

遊倉 カオル

由緒正しき エキソシスト 被_レ魔者

江戸から続く本家で180代目

歴史上最強と言われたカオル。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E

あからさまな正体（前書き）

感想待っています。

あからさまな正体

目が覚めると、昨日とほぼ同じ光景であった。
ただ違うのは、僕の上にソイツが寝ていると言う点だけ、

「……………」

低血圧な僕は自分の体に重みを感じゆっくりと目を開ける。
すると、ドアップでソイツの顔が合ったのだが、なんせ脳がまだ寝
ている為
理解に約7分はかかった。

その間に何度か眠りに着いたので事実的には理解にかかった時間は
約2時間とちよつと

「……………」

どうしよう、この状況。

目と鼻の先に……………という言葉があるけどまさにその通りだった。
鼻はすでに付いている、目はもう？？ほどでくっ付きそつだ。

「ん……………」

お、起きますか？

「……………はっ！！」

「ぎゃあああああああ」

「あだっ！！」

いきなり殴られた。

しかもグーで

朝ご飯を食べている途中でも、ブーブーと文句を言っていた。

「なんですか、君は、」

「なんですかって、寝相が悪いのはお前だからな」

「知りません！！ そんなこと」

「知りませんじゃねえよ！！ お前が100%悪い」

「私は悪くありません。あつたとしても、せいぜい32%くらいです」

「なんだその中途半端な数字は！！」

ああ、もういい」

僕は食器を洗面台に入れて、天翔に言い放つ。

「、でも・お前の寝顔可愛かったぞ」

天翔はいきなりの言葉に動揺したのか、はたまた素で喜んでいたのかはわからないが

段々と顔が赤くなっていき、食器を投げつけてくる。

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい」

「ちよ、待て。な、箸は止める！！ 痛いから目に刺さったら

」

無限に投げつけてくるので、僕は足早に部屋を出た。

今日も目的は、カオルの協力を得る事であるから。

これなら、僕でもできます。 はい、

公園。

僕が飛ばされてきて寝ていた公園

と、思えば携帯はないので連絡は取れない

はたまた、会いに行こうとしたがカオルは家に居るかすら不明である。

そつだ、一旦家に帰ればいいんだ。

と、思い颯爽と家に戻る事15分。

「意外と遠かった……」

息をぜいぜいとしながら家の近くまでやって来た。

たしか5月1日の僕の予定は……。

お、覚えていない。

それもたしかだ。2ヶ月前の出来事なんてそうそう覚えてはいない、それも日常的なことなんてなおさらだ。

とりあえず、家に入ってみよう。
僕を見たらとりあえず殴ろう、うん、そうしよう。

知らない人人家に入るようにこそつと玄関を開ける。
すると、いきなり

「あれ、どうしたのお兄ちゃん？」
と、後ろから声が……

ゆっくりと振り返ると、そこには 妹がいた。

「なんだ」

「なんだって？ まさか、妹が居ないうちに下着を盗んでどう『なわけ！』うっそだあ」

こいつ、どんだけ僕を犯罪者にしたいんだ。

「ほら見る、僕はどこにもお前の下着なんて持ってないだろ
そう言いながら、両手を上げる。」

「…………ツ」

「ええ！？ 今なんで舌打ちしたの？ どんだけ僕を犯罪者にした
いんだああ」

「嘘だよ、お兄ちゃん。」

「その言葉に裏がある事を僕は今、知った」

そういいながらも家に入っていく。
とりあえず居間には僕はいないようだ。
と、なれば……………。

「お兄ちゃん、お昼どうする……………って、いないし」
妹の言葉を聞き流し、僕は自室へと足を運ぶ。

こそつと、自室の扉を開けると案の定、爆睡している僕がいた。
GWは何かと怠く、何日かは1日中寝ていた時もあったとついさっ
き思い出した。

僕は、ベッド付近にある携帯を取りだし、カオルに連絡を入れる。

『話したいことがある。夕方、公園で待ってるぞ！ P S 返信は
不可』

行きよいよく送信ボタンを押して、履歴を消す。
そのまま元あった位置に戻し、僕は足早に部屋を去った。

一階へ行くと、妹が話しかけてきた。

「お兄ちゃん、お昼は？」

「ああ、いらね 僕、寝るから」

そういって、僕は玄関から家を出た。

何で寝るのに外に出るの？と妹から言われ続けたが逃げ切った。そして、僕は再び天翔の家へと舞い戻ったと言うわけである。

「で、遊倉カオルとは接触できましたか？」

「いや……夕方に……会う約束はしてきた」

「ほう、それで家に帰ったと言うわけですね」

「そう……いう……わけだす」

昼飯を食べながら（僕が作った）話を進める。

「で、お前は何か情報を掴んだのか？」

「はい、願い悪魔は恐らく女性に憑りついています」

「何故!？」

「はい」

そういつた天翔は黙々と語り始めた。

余りにも長いので端折ると

昔、ある人がとても好きだった女性がいた。

女性はその人に猛アピールをしたそう

しかし、願い叶わず……その人は別の人と結婚してしまったとな

それで、怒り狂った女性は、神社の倉庫に忍び寄り
悪魔と呼ばれる干からびた腕を……腕に憑りつかれてしまったそう
な。

その女性は2人を殺し、自らも死を選んだ。

しかし、その干からびた腕は死んだ女性から離れ、どんとんと人に
憑りつき

やがては『願い悪魔』と呼ばれるまでに浸透した

と言っ事らしい

「1言いいか？」

「どっぞ」

「完全なる逆恨みっ!!」

「まあ、そうですね(笑)」

「(笑)を付けるな、」

結局の所、何1つ情報を掴めていないと言っのが現状。

P m 4 : 0 0

律儀にも30分前にも関わらず、カオルの姿は在った。

僕らはカオルの前に立ち、話を始めた。

「最初に言っておく。僕は、この時代の僕ではない」

「……うん、わかってる」

「そうだ、最初は戸惑う…へ!？」

え、何で知ってんの？

僕、何か言ったっけ？

「え、何で知ってんの？」

「そこにいる子、天使でしょ。僕わかるんだ。人並じゃない力の持ち主って」

あはは、と笑いだすカオル。

カッコ可愛いと言う言葉が世界で一番似合う男だな。

「そうか……それなら話は早い。『願い悪魔』の事だ、お前も話くらい聞いたことあるだろ」

「ああ、昨日会ったよ。この前見た時よりも成長していた。」

「やっぱり、願いを叶えられることに人を喰らい成長していく……と」

「うん、あいつは危ない。」

「と、言うわけで君達には『願い悪魔』退治をしてもらうぞ」
突然、滑り台の上から天翔が叫んだ。

後ろには小さい子供が『早くしてよ、』と呟いている。

「まあ、僕の所に来たのは正解だよ。」

「そうなのか？」

「だって僕は被^{エカクシスト}魔者だからね。」

「……はい？ 被魔者？」

何、クリカラとか青い炎のこと？

「それは、アニメでしょ。僕は被魔者。あつちには被魔師だから。」

「まずお前が被魔者ってことにも驚いたし、よく何十年も隠し通せていたな。」

「まあ、僕が被魔者になったのもここ数年だし。」
あははと笑うカオル

「お前の力があればそいつを止められると……。」

「うん、封印まではわからないけど、動きを止めさえしてくれば。」

「と、言う事です。」

再び、決めポーズをとる天翔。

今度は、ブランコから……。

本当に天使か？ あいつ、

もうただの小学生にしか見えんぞ

「誰が小学生じゃ、せめて中学生だろ。」

いいんだ中学生で……。

年齢不詳の天翔は高らかに言い放った後、僕はカオルに

「と、いうことだ、カオル僕に協力してくれ。」

「君の頼みとなっちゃあ断る理由はないよ。」

僕とカオルは互いに握手をし、協力をする事となった。

その帰り道、僕はカオルに現状を説明した。

「ふむ、ふむ……君は未来で死んでしまって、過去を変える為にここにいます……。」

「そういう事だ。」

「まあ、いんじゃないかな。少しは面白味のある人生の方がやりがいがあるでしょ。」

ニコツと笑うカオル、惚れてまうやるー。

「そうです、人生おもしろい、いたいた、痛いですう。」

「全ての原因はお前だからな、それを忘れんなよ。」

「あいあいさー。」

頬を引つ張られながら、敬礼をする天翔。

「その子は本当に天使なのかい？」

「ああ、僕は天国でコイツに会っている。」

「私は、天国にいる私と同一人物、分身みたいなものです。」
「なるほど……」
ふむ、ふむ、と頷くカオル。

「それじゃあ、明日から『願い悪魔』を倒しに行くよ」
「了解っ！！」

僕と天翔はカオルの言葉に敬礼をし、カオルと別れた。

夜

「それにしても、いい奴だな、遊倉、カオル」
「だろ、僕の親友だからなっ！！」
「・・・それは100%関係ないです」
ご飯を食べながら、そんな会話を繰り返す。

そして、いつものように眠りに着く。
こんな生活をもう1人の僕がしていたと知ったら驚くだろうな・・・
と少し優越感と言う物を覚えながら、天翔の横顔を見て今日も眠りに着く。

「ゲガアアアアアアア」

その人物は、左腕に包帯を巻き

パーカーを深々と被っていた。

T
O
B
E
C
o
n
t
i
n
u
e

憑りつかれた少女（前書き）

タイトルを思い切って変えてみました。

これからもよろしくお願いします。

感想も待っております。

憑りつかれた少女

GW3日目

ついに、『願い悪魔』との出会いの日

と、言っても相変わらず低血圧な僕は天翔にたたき起こされてもぼーっとしている。

その隣には、何故かニコニコしているカオルもいた。

「君の寝顔が見れるなんて、嬉しいなあ」

くっ……………、その言葉、僕がカオルに言いたい。

それから数時間はぼーっとしている僕をからかって時間を過ごして
いた。

「よし、行きますか」

「あい、あいさー」

「了解だよ」

僕ら3人は部屋を出て近くの公園でそう宣言した。

傍から見れば、可笑しな3人としか見られないけれど……………。

「で、今日だよな、『願い悪魔』と会える日って」

「うむ、ですが、『願い悪魔』の性質上、現れるのは夕方から深夜にかけてです」

「そうだね、僕が出会った時も、深夜だったし・・・」

「・・・カオル今何て？」

「え？ 願い悪魔に出会ったのは深夜だったし」

「はあああ！？ お前、願い悪魔と遭遇したのか？」

「あれ言っただけじゃなかったっけ？ 一昨日かな・・・一度は捕獲したんだけど逃げられちゃってさ」

「あはは、と笑うカオル。」

「・・・おい、知ってたか天翔？」

「いえ、経った今、知りましたです」

「本当に、カオルって被魔者らしいな」

「そうみたいですな」

「あれ、2人で何の相談かな？」

首を傾げて、聞いてくるカオル。

「いいや、こつちの話さ」

「そうです、それより『願い悪魔』予測ルートを絞らないといけません」

そういって天翔はベンチの近くに会った小枝を拾い、地面に書き始めた。

「先週から出没している『願い悪魔』。その動きは不規則である時は、この街を一周。またある日は、ただ漠然と立っているだけ。などとルートは絞り込めませんね」

「いや……」

僕はここ一週間『願い悪魔』が通ったとされるルートを書いた地面に新しい線を入れた。

「この、場所付近だけ様にとおっている。他の場所はせいぜい1回、2回だが、ここだけ何重にもひかれている。」

「と、いうことは？」

カオルが嬉しそうに聞いてくる。

「恐らく、今日、あいつはここに現れる」

そう言っ僕が小枝で丸を書いたところは

僕らの高校だった。

「で、なんで家で飯食ってんだ、僕ら？」

「だって、腹が減っては戦は出来ぬだよ？」

「いや、疑問形の質問を疑問形で返されても……」

「まあ、いいじゃないですか」

僕、カオル、天翔は一度家に帰り、夕飯を食べている（僕が作った。）

「それにしても、君の作った、料理は最高だね」

「カオルに言われると、嬉しいなっ」

「美味しいですね」

「お前に言われると、非常に嫌な気分になる」

「ひどいですよぉ〜」

あははは、僕とカオルは笑った。

現在の時刻はPM 10:00

「さて、準備はいいかい？」

「問題ない」

「あ……いさ」

「子どもは寝る時間だもんな」

「子どもやないもん」

いや、半分寝てますけど。

「さあ、張り切って行ってみよあー」

「ゲウウウウウウ」

高校のグラウンドへ行くと、そこには黄色のパーカーを深々と被った左手に包帯を巻いた

『願い悪魔』がいた。

「どうぞやら、合っていたようだね」

「ああ、僕の推測は2つあっていましたようだ」

「2つ？」

天翔は眠い目を擦りながら、僕にそう言った。

「1つ それは『願い悪魔』がこの私立 終条学園しゅうじょうがくえんにいると言っ
推測」

「と、いつか、高校名初めて聞きました。」「
目が完全に冷めた天翔の言葉。」

「まあ、それは言っていたね。」

「もう1つは、」

僕が指を差すと同時に、少し強めの風が吹く。

その時、深々と被っていたパーカーの帽子が飛び、『願い悪魔』に
憑りつかれた正体が
判明した。

その子は

「久しぶり……いや、この世界では初めましてかな、蜜葉
英梨さん」

僕はニコツと囁いた。

そう、『願い悪魔』に憑りつかれたのは
結弦が死ぬ前に告白された少女。

蜜葉 英梨であった。

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e

憑りつかれた少女（後書き）

いよいよ出てきました。

次回は願い悪魔編最終回です。

お楽しみに

W i s h y o u ?

「グガアアアアアアアア」

もう、何を言っているのかすら不明だ。

もう、人間ではない。

怪異と言う物は恐ろしい。

人を

壊す。

「さつてと、始めましょうか」

「っていうけど、カオル具体的には僕らなにすりゃーいんだ？」

「そうです！！ 私は天使ですけど、この子は一般人、人間です」

「そうだね、簡単な話から言うと、この怪異は僕ら被魔者が左手を封印しないかぎり

あの子は助からないだろうね。それと……」

カオルは『願い悪魔』に憑りつかれている蜜葉さんを指差して

「あの子の精神がなくなったら、その時点で2度と人間には戻れなくなってしまう」

「……………」

「……………」

僕と天翔は黙り込んだ。

それはカオルを無視したのではなく、考えを立てている為である。

「そう、昔からそういう人だったね、君は」

カオルはニコニコしながら言ってきた。

小学校の頃

みんなでかくれんぼをやった。

結局最後まで君は見つからなかった。

何処に隠れていたのかは今も分からず仕舞い。

中学校の頃

少しばかりケンカに会った時、君は言わば悪知恵というものが働いて1度も負けなかった。

それどころか1回も殴られていなかった。

そして、今君は

彼女を救う為に何を考えているのかな？

「よし、わかった。」
僕は手をたたいて、気合を入れる。

「カオルは封印の準備をしていてくれ、この戦いは僕と天翔で受け持つ」

「了解だよ」

「えー、私も戦うんですかあ」

「お前がやらんと絶対勝てんわ!!」

ガヤガヤと2人が言い合っている中。
とうとう、動き出した。

ダダッと人間離れた速さで近づいてくる。

「天翔!!」

「あいさー」

天翔は僕と走り出した。

後ろでは同時にカオルも準備を始めた。

「ギガガガガガガガ」

左手で地面を殴り、振動を起こした。

「おっと、」

「危ないです」

天翔の言葉が一瞬、聞こえなかった。
その一瞬で、願い悪魔は

僕の所へ

攻撃を仕掛けてきた。

「ぐがつ……………」

腹に左手が悪魔の忌まわしき手が、僕の腹に刺さった。

そのまま、投げ飛ばされ、僕は校舎近くの草むらに落ちた。
遠くから天翔が近づいてくる。

願い悪魔は僕を倒したことで奇声をあげている。

「大丈夫ですか」

天翔が駆け寄り、僕の隣へ移動する。

「あ……………」

意識が朦朧としてきた。

これが怪異。

か、勝てない。

「もう、いいわ……………あ……………とは、まか……………せた……………よ」

「ダメですっ!—!」

そんな言葉だけ、大きく聞こえた。

「こんな所で死んでどうするんですか!!」

それじゃあ私が、私が君を生き返らせた意味が……君にはまだ」

泣いている。

僕の為に……。

「で……も、ぼ……くに、ちか……らは、ない」

血が出ている、出ていない、の問題以前に目が霞んで、もはや目の前にいる天翔すら見えない。

「大丈夫です、私が君の力に……力を貸しますから。言ってください……!」

そうか……と僕は呟き、動かない足を強引に使い立ち上がる。

「天翔、僕に、力を貸してくれるかな」

「はい」

僕はそっと天翔を撫でた、その瞬間光に包まれて目を開けると

僕は、僕の体の痛みは無くなっていた。

「なんじゃこりゃー」

なんじゃこりゃって何がですか!!

「あれ、脳に直接天翔の声が……」

当たり前です、今、私と君はリンクしました。

「……………、言っている事と、この説明不可なコレは後で死ぬほど説明してもらってからな」

わかってますって。

「さつてと、第2ラウンドの幕開けだ。」

僕は指を鳴らし、願い悪魔に飛び込んで行った。

体が軽い、まるで羽のような軽さだ。

当たり前です。

そのまま奇声をあげている願い悪魔の頭に蹴りを入れる。態勢を崩して崩れ落ちるが、そのまま振り返り、腹に回し蹴りを入れる。

「グガッ」

流石に、効いた様子でここから逃げようとしている。

「どうする、天翔。」

封印には気絶がオススメかと……

「お前の力って必殺技ってなの無いの？」

あるには、ありますけど使ったら間違はなく蜜葉 英梨の体は
消滅します

「では、パスで」

物騒な事を言うなあ……

「じゃあ、普通に気絶で」

地面を強く蹴り、大空へ飛んだ。

「ひっさつ てんくう おとし〜」

そのまま、落下し蜜葉英梨もとい願い悪魔めがけて落ちた。

「ギッ」

判断の遅かった願い悪魔はそのまま踏み潰され気絶した。

「意外と呆気なかったな」

まあ、基本的にこの怪異は戦闘向きの怪異ではなく、願いを叶えてその人に憑りつき幸福エネルギーを奪うっただけですからねえ

その後、カオルの手によって願い悪魔は封印されて僕と会う2ヶ月前の蜜葉 英梨の姿となった。

「でさ、」

「ん？ なんだ」

「なんで君は女の子になっているのかな、かな？」

「お前に言われたくないわ！！！」

そう僕の今の姿は

完全に女の子。

願い悪魔を倒してカオルが封印している間聞いた話によると
リンクしている間は天翔のパーツも混じる為こんな姿になると言う
のだ。

白色で長い髪　少し発育のいい胸　女の子の体　はまだいいとして

………

「なんで、僕の顔なの？　僕、女装趣味の変態さんじゃねえよ」
「なんで、いいじゃないの？　今の君はどう見ても女の子にしか見
えないよ」

「うわあああん　女の子のカオルに言われたああああ」

「……いや、僕は女の子じゃないし」

どうやら僕は、カオル並みの男の娘らしい。

今までそんなこと気にしたことなかったけど、

だから、カオルと一緒に帰っている時、よく男子に声掛けられるわ
けだ。

言葉口調とか絶対男だと思うのになあ………。

「どうせ、どうせ僕は男の娘ですよ〜だ。自分に自信のない男の
娘ですよ〜だ」

あらら、すねちゃいましたか。

「まあいいじゃないの」

「……よくねえよ!! なにこの胸!! 天翔はペッタンコだったから僕がもし女だったらこんな姿だったの!? いやだあああああ」

私、ペッタンコじゃないよ!!

もう、リンク解きますね。

ようやく、気が落ち着いた頃。

「で、この子はどうするんですか?」

「そうだなあ、蜜葉さんは2カ月後まで僕と会っていないから……カオルまかせた。」

「ええ!? 僕? ……まあ、君に頼まれちゃあしょうがないか」

「ありがとうな。それと、僕らはもう逝くよ」

「そうですね、この時代にはもう用は在りませんから」

「そうかい、なら次会えるのは1度君が死んでからってことかな?」

「そういう事になるな」

「……少し、寂しいな」

「大丈夫、僕は必ず戻ってくるから」

「その言葉通り、待っているよ。」

「ああ、最後に匿名で蜜葉さんに言っておいて欲しいがあるんだけど」

「いいよ、言っておく」

僕はすううと息を吸って

「髪は短い子より長い子の方が僕は好きだな」

ニコツと笑顔で僕は呟き、

僕は、2010 5月 1日を後にした。

次、僕を待っている時代はどこなのか僕はまだ知らない。

それこそ、神のみぞ知るならぬ

天使のみぞ知る となるだろう。

さて、次はどんなことが起きるのでしょうかね

T o B e C o n t i n u e

次の世界は23年前（前書き）

次の世界は23年前です。

ここではある人達が登場！！

それではお楽しみに

感想待ってまーす

次の世界は23年前

目を開けると・・・再び白い世界が広がった。
ここは前にも来た覚えがある。
夢の中と死んだ後に

「おーい、お疲れ様」

空を見ている僕を覗きこんできたのは少女。

「ああ、お疲れだ」

僕は怠そうに呟いた。

「そんな、ことなさそうじゃん」

そういつて少女は缶コーヒーを差し出してくる。

「メンタルではもうボロボロだぞ」

僕は起き上がり、缶コーヒーを受け取る。

「ってか、この世界にもコーヒーとかあるんだ。」

「そりゃあるさ。この場所にない物なんてない」

「へ〜」

「コーヒーを一気に飲み干し、缶を雲の上に置く。」

「で、次はどこなんだ？」

「どこといますと？」

「いや、時間軸の事だよ」

「ああ、それ、すっかり忘れていました。」
「いや、忘れんなよ。」

少女は鞆を取りだし、せっせと何かと取り出した。

渡されたのは……一枚の紙

内容は

ない。

「……少女さん、この紙真っ白なんですけど」

「うん、わかっているよ。だって真っし、いたいたいですう」

「だったら、最初から渡すな!!」
僕は少女の頬を引っ張って、怒った。

「ううう、わかりました。ではさっそく次の時間軸へ飛んでもらい
ましよう」

「意外とあっさりだな……ちょっと待て、天翔は？ お前は来ない
のか？」

すると、少女は笑って

「行きますとも、今回も下で待っています。すぐ隣にいると思うので
よろしくと言っておいてください」

いや、お前とアイツ繋がっているんじゃないのかよ。

「では、よい旅を……」

「ああ、まだ乗り気じゃねえけどな」

少女は指を鳴らした。

その瞬間、僕は眩しい光に差し掛かり、目が覚めると……

「起きましたか？」

隣で座っているのは、天翔。

「ああ、まだ頭がくらくらする」

「それは時間移動の時の副作用的な物です。その内なれますよ」
「なれたくねえー」

そういつて立ち上がった時にバランスを崩して、地面に倒れこむ。それと同時に前方からも誰かが倒れてきた。

「「あだっ!!」」

地面に倒れかかった2人の音がハモった。

「大丈夫ですか？ お2人さん」

「いたたた」

「すみません、よそ見をしていたもので」

あら、この声聞いたことあるぞ。

何処だっけなあ……TVじゃないしラジオでもないゲームでもなければ

そう思いながら「大丈夫ですよ、」と立ち上がった時、体全身が固まった。

固まったという表現は少し可笑しいと思うので撤回しよう。

体中に電撃が走ったような感覚に陥った。

「どうしたんですか」

少女は上目使いで僕を見てくる。

「い、いえなんでもないです。大丈夫ですから。」

僕は全力で手を振り大丈夫アピールをした。

「そうですかぁ、いつ良いですか」

「……え？ あ、はい」

「ここ、何処ですか？」

・・・・・・・・・・はい？

「この土地の人じゃないの？」

「いえ、この街生まれ、この街育ちですけど」
彼女は言った。

「簡単に言うと私、方向音痴なんですよ」

「うん！！ 実に簡単！！」

思わず、大声でツツコンでしまった。

「わかりませんか、終条学園に行こうと……君も制服着てるじゃないですか」

「……………え！？ あ、ほんとだ」

服を触り、確かめる。

しかし、あれだ……………何故。

スカートなのかが僕にはわからない。

「まあ、いいです。頑張って見ますので」
そういつて彼女は何処かへ行ってしまった。

.....。

辺りにはシーンとした空気が流れ込み、隣で猫と戯れている天翔もその空気に気づいた用であった。

「やっぱり……女装趣味があつたんですね」

「ねえよ！！心の底からねえよ！！今、初めてスカートなんて着たわ、ドアホー！！」

天翔はその言葉をガン無視。
うん、僕泣いてもいいかな。

「……………はい……………。。。。わかりました。」
そういつていた。

「で、ここは何処で僕らは何をするんだ？」

「実はですね、ここは」

天翔が指を差した先に目を向けると驚愕した。

目の前に終条学園が設立当初の学校があつた。

やっぱりか……………。

「Yes!..!」

「そんなはずはないですよ。」

「いや、さつきまで違うと思っていただけどこれを見て確信した。」
「そう言っ僕を取り出した物は……」

生徒手帳。

3 - 1 組

凜来 律灯

「これがどうかしたんですか？」

「これ、母親の旧姓だわ」

僕は頭を抱え込み、悩んだ。

「何で、高校3年ってことはここは23年前の時間軸かよ」

「ええ、それは確かです。」

「やっぱり可笑しいと思ったよ、だって妹そっくりの顔が目の前にあつたんだもん」

「それは母親さんも思っていたと思います。」

「何でだよ、まだ妹の顔すら知らねえはずだ！　で、なにすりゃー帰れるんだよ」

途方に暮れる僕。

そして天翔が次に言葉にした事により僕は止む　追えず協力するこ
とになる。

「この世界で君は、母親と父親をくつつけるのが目標です!!」

ああ、思ったよ。

今回はとても疲れそうだと

後、何故スカートを穿いているのか、原稿用紙200枚程度で教えてほしい物だ。

T o B e C o n t i n u e

両親のクラスへの転校（前書き）

記念すべき10話目

最近、アクセス数が伸びません。

あんまり面白くないのかな…

アドバイスなどありましたら
ぜひお願いします。

両親のクラスへの転校

以下、略。

母親に出くわし、何故スカートなのかと天翔に問う事2時間
結局、僕が息子だとバレた時点で僕は消えるらしい。
なので

「だからって、またこの体かよ」

しょうがないです、でないと死んでしまいますよ？

「いや、もう1回死んでるし」

呆れて何もいえねえよ。

僕はそう呟いた。

その後は、天翔が前に住んでいた（2011年5月の時代）に言ってみた。

どうやらこの時間軸には、まだないらしいただの空き地だった。

どうしようと、この姿で考えていると

いつの間にか夕方になっていた。

「あゝ、茜色やなあ」

そうですねえ

「宿、どうしよっかな……」

最悪、野宿ですねw

「笑いを付けるな、お前も一緒なんだから」

私は君がいれば平気です。

「まあ、何か起こるとしたら僕の体だからな」

そうですね。

そうこうしている内に本格的に夜になってしまった。

「あ、どうしたのかな？」

「……ん？」

僕は木にもたれ掛りウトウトしていると誰かが声を掛けてきた。

目を擦り、声の方を向くと……

かあさんだ。

本当ですか!？

天翔も驚いていた。

何故、こんな真つ暗に見つけられたのかと思ったら、どつちやら僕の髪が夜では

目立つようだ。

「いや……」

一瞬ためらった。

かあさんに頼むのもいいけど、もしバレたら色々と厄介な気もする。

大丈夫でしょう。

なんだよ、その根拠。でも今は頼れる人がいないし……

「えつと、実は明日から終条学園に編入するんですけど、あいにくこつちに知り合いがなくて、泊まることもないんですよ」

「じゃあ、家に来なさいよ」

そこから僕はおいそれとかあさんに着いて行った。

それと、かあさんと呼ぶとなんか可笑しい人と思われるのでこれからは

律灯ちゃんと呼ぼう、不覚だけど。

「ねえ、律灯ちゃん？」

「……あれ、私名前なんて言ったっけ？」

「……おっと、さっそくミスってしまった。

僕は知っててもあつちは僕の事を知らないんだった。

「あ……えっと、そう今日、これを拾ったの」

そう言っつて僕はポケットから学生書を取り出した。

「あー、それ何処かで落としたとおもってたのに……!!」
超嬉しそうに喜んでる。

「そうだねえ、私は律灯ちゃんていいとして……君の名前は？」

「……またも大ピンチ……!!」

どうしよう、朱林、結弦なんて言ったらその後の未来に影響があるのかもしれない。

なら、今考えましょう。

うおー!? いきなり話しかけてくんよ、ビックリしたわ

苗字は、青……青音……せいで言いとして名前、名前

そうだ。

たしか、結弦って名前の由来は弦を結ぶ。

じゃあ、音を奏でるで

奏だー！

「えっと、青音、奏です」

「奏ちゃんか、よろしくね」

ニコツと微笑むかあさんもと律灯ちゃん。

ってか、実のかあさんを『ちゃん』付けて……

こうして、この世界1日目は律灯ちゃんの家泊めてもらう事になった。

2日目は大終条学園に編入、もちろん3-A組

入ったと同時に男子からの歓声を受けた。

転校してくる女の子ってこんな気持ちなんだなあ、普段では出来ないような体験ができた。

そして、担任の先生から重大発表。

「青音が転校してそうそうあれなんだが……明日から修学旅行だ。」

……はあ？

修学旅行ですと

え……マジで!?

なんで……え？ 今、10月じゃん

「それでだ、お前を急ぎよ、朱林達の班に入れることにした。凜来と知り合いらしいからな」

そりゃあ、まあ親子ですから。

……って朱林って言った？

もしかして

クラスを確認すると、律灯ちゃんが手を振っている。
その後ろ、窓側の席一番後ろにいたのが

金髪でいかにも不良っぽい朱林あなはやし 無音むおん

すなわち、僕の父さんがいた。

「よろしく」

僕は席に着いた。場所的に言うと父さんの横めっちゃ睨んでる。怖い 怖い こわいですよお

「君、ハーフ？」

「……へ？」

声を掛けてきたのは僕の前の席にいる女の子。

「……まあ、一様。」

天使と死んだ人間だけだな

「……あ、自己紹介が遅れた。私は遊倉ゆうくわ 瑞穂みずほだ。呼ぶ時は瑞穂
でいいからね」

遊倉……この人、カオルのお母さんじゃん。

さつきから、驚くことが一杯で疲れた。

天翔は話しかけてこねえし、この姿も何時まで持つことやら……

その後、休み時間ごとにクラス 学年 学校中から男子達が噂
を嗅ぎつけ
色々と質問をしてきた。

そして、時間は流れて放課後
明日は修学旅行だと言うのに何の用意もしていない。

「奏ちゃん、かえろっ!!」

「はい」

「私も」

そして6人で帰ることになった。

先頭には律灯ちゃん

その横に僕がいて

その後ろにカオルの母さんの瑞穂さん

その横にはさつき紹介された黒夢と言う人

「クッククク 我の名は黒夢。お前は我と前世に合っておるだから
こんなにもきょうめ」

「黒瀬 夢時な」

「・・・それをいうなあ」

ブンブンと怒り、瑞穂さんに叩いている。
どうやら厨2病らしい、23年前にもあったんだ。

で、その後ろが蜜葉 流星

この人は蜜葉 英梨の父さんだ。

どうやら、僕の父さんと仲がいいらしい。

「初めまして、蜜葉 流星です」

とても正義正しく、何故今の父さんと仲がいいか不明である。

そしてその隣にいるのが僕の父さん

朱林 無音

「ああ…朱林 無音。よろしく」

そういっただけだ。

元々、無口なのは知っていたけど、これまでとは……………。

そんなわけで、明日はいよいよ2泊3日の修学旅行が始まるわけだ
が……………

やっとできましたよ。

天翔が今日初めて声を掛けてきた。

「どづしたんだ？」

僕は、律灯ちゃんの家で1部屋借り、ベッドの上で寝転がりながら呟いた。

この時間軸の情報です。

それから、天翔は語った。

この時間軸似た理由は父さんと母さんをこの修学旅行中にくっ付けること。

出来なければ、運命は変わってしまい最悪、僕と妹は消えると言う。

その情報で2人は幼なじみで4歳から一緒だと言う。

2人共互いの事を意識しているが中々気持ち伝えられず今に陥っている。

さらに、さらに父さんが金髪にしている理由は母さんに変な奴が付かないようにらしい。

「うーん、3日で2人をくっつけると……」

そうです。

「まあ、容易じゃないな」

大丈夫です、この2人は好きな事をばれていないと思っ
ていますが

クラスのメンバーは全員知っています。

だから、協力は可能です。

「なるほど……」

僕はふかふかとしたベッドの上で寝転がり、一言。

「この3日で僕の生命が左右されると……」

ですね。

「やりたくねえー、自分が生まれるには自分の力が必要なんて」

そうですか？ 頑張ってくださいね。

しょうがねえなど呟いた後、僕は電気を消し眠りに着いた。

朝、起きて律灯ちゃんを起こし、急いで集合場所の駅へ向かった。
その途中、無音くんに会い、3人で登校。
どうやら、このメンバー6人には何も気がいな加え無いようだ。

そして、いよいよ僕らのいや僕の存在を掛けた一世一代の2泊3日
は静かに始まった。

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e

ドキドキの修学旅行（前書き）

感想待ってます。

ドキドキの修学旅行

バスに乗り、やんやとやっている人達がいたり
シーンと静まり返り眠っている班があったりもする。

我が班はもちろん後者であり今起きているのは誰もいないという状況だ。

そして、6人が爆睡している内にもバスは刻一刻と京都へ向かっていくのであった

え……修学旅行って京都だったの？　ワオ初耳。

時間は流れに流れもう1日目終了時刻。

ここはホテルである。

1日目は特に予定もなくムダに歩き回ったくらいだ。

僕の部屋は同じ班の律灯、瑞穂、そして黒夢となっている。
いちよう僕男なんですけど……

「で、これからどうするんだよ」

「ああ？」

「さあじゃねって」

「そう？」

「ちげえよ!!」

僕は今

女子風呂（大浴場）の前にいる。

「どうしたの、奏ちゃん？」

「……いや、こっちの話です」

ぞろぞろと女子生徒が入っていく中僕はその手前で止まっていた。

どうやってたら、この危機を回避できるんだ。

それは、ムリですね。

無理とかいうなよ、僕ここで泣くぞ

それは困りますね。

だろ

私が

お前がかよっ！！

冗談です、わかりました。

何が分かったのか詳しく原稿用紙200枚くらいでまとめてきてほしいんだが……

そうですか？ なら、今から原稿用紙に書いて

まで、まで、まで、まで。今は冗談だ。

そうですか…… 方法は簡単です。少し目を閉じていてください。

こ、こっか

僕は目を閉じた。

大丈夫ですよ。

ああ？

あれ、変わったる。

そうです、今は私が主体となってこの体を動かしていると言っわけです。

なんだそんなことが出来るならもっと早く行ってくれよ

まあ、私も気づいたのさつきですから。

そうとなれば、後は頼んだ。僕は、寝ているから。

ガッテン了解です。

そんな、脳内での会話を終え、奏（天翔が動かしている）はクラス
の女子達と無事に
風呂に入りに行った。

ちなみに僕は寝てました。

本当だよ、本当 嘘偽りは在りません。

ホントウデスヨ

その後の事は知らない。

かれこれ1時間以上、風呂に入っていた為僕は本格的に寝てしまっ
ていた。

気が付いた時にはもう消灯、僕は隣に母と片方には親友の母親と寝ていた。

「なんだこのカオス」

頭を押さえ、頭痛を止める。

後、2日……2日で2人をくつつけないと。

おや、起きましたか

ああ、で状態は？

夕食の時に聞いたのですが、やはり遊倉 瑞穂も黒夢さんも蜜

葉 流星もクラスの

メンバーが一丸となって協力イベントが明日発生します。

イベントってw

でも、それだと僕が来なくても自然に発生したんじゃない……

いえ、ここからが重要！！ 赤線を引いてください

ごくっ 僕はつばを飲み込んだ。

君が無音に……父親に気持ちを誘うのですよ。
明日、発生するイベントで確実に気持ちを伝えさせるにはまず自分の気持ちを
分からせておかないといけません。

いや、内容的に理解不能なんですけど、簡潔に言つと父親に母親が
好きだつてことを
言わせるにはその気持ちを理解させるってこと？

まあ、そんなものです。

なんや、かんやあり僕は深夜0時くらいのホテル（中庭）にいた。
理由はどうやら父親がいるらしい。

しかも、何故か青音 奏ではなく朱林 結弦としてだ。

どうやら、天翔が寝たおかげで効力も切れたとさ………どうすんだ？

トコトコと中庭へ歩いていくと、噴水前には無音（父親）がいた。

「やあー！」

「……ああ、誰だお前」

父親は妙に僕の顔を見てくる。

「律灯に似ているな……お前、誰だ？」

そりゃあ、まあ親子ですから。

「まあ……修学旅行に来た、ちょっと面白そうなおことがあったら軽はずみに了承してしまう」

なんとも普通の高校3年生ですよ」

実際は2年だけだな

「……よくわかんねえけど、同じ学校ってことか」

「そんな感じ」

「で、俺に何の用だ」

父親は噴水前に座った。

僕は率直に

「かあ……凜来、律灯さんには告らないんですか？」

ぶふううう

父親は盛大にはいて、僕の胸ぐらを掴んできた。

「ああ、なんで俺が律灯に告らねえといけえんだ」

「まって……首が……」

「あ、わりい」

僕は息を盛大にはいて、吸う。

そして再び、話題へ

「単刀直入に言うと、僕はこの修学旅行の最終日、律灯さんに告白します」

父親は無音は黙って聞いていた。

まあ、冗談である

「でも、2人の事は良くご存知です。幼なじみで仲が良い事も朱林さんが律灯さんの事を好きな事も……」

「それがどうした」

無音は重い口を開いた。

「まあ、たしかに俺は律灯の事が好きかもしれないけど……
それでも、それでダメだった場合、俺はアイツに話すことはできなくなる。だから、
この関係を……幼なじみとしての関係で十分だ。」

そう終わると、僕を横切りホテルへと戻っていく。

僕は背を向けている無音に一言

「律灯さんが今まで告白された数知ってますか？」

僕は父親が喋る前に話し出した。

「この3年で29回 可笑しいでしょ、この回数 of 異常もあるけど、全員断っている。」

その理由が『私には好きな人がいる、その人は自分を犠牲にまでして私を護る為に』

ワザと私に合わせて高校を選んでくれた、私の為にワザと不良の役を買って出てくれた。』

と言っていたらしいですよ。」

「……ケツ 知るかよ」

その言葉を捨て、無音はホテルへと戻って行った。

結局、運命は変わるかどうかは僕の言葉次第だったのだが、まあ、国語の文章表現なんてものがいつ役に立つかと思っていたがまさか自分が生まれることに役に立つと思わなかった。

僕はホテルに戻り、眠りに着いた。

明日には、イベントが発生する。

翌日。

朝、起きたら再び奏に戻っていた。

その後、3人を起こし朝食を食べた。

どうやら、この姿は寝起きがいらいしい

低血圧の僕がこんなに簡単に起きれるはずないからな。

父親はと言つと………

「どうしたのですか、無音。そんなクマなんて出来て」

「あははむーくん、今日が楽しみ過ぎて寝れなかったとか」

「それは面白いですね、流石、無音くん」

「くっくっく 我の魔術に憑りつかれて寝れなかったのであろう」

「うっせえ、黙っとけ」

目の下に可笑しいほどのクマが出来ていた。

「ああ、奏。お前も俺を笑うのか？」

「い、いやあ、何か悩みでもあるのかなあと」

「そついえば、今日は自由行動だっけ？」

「そうでしたね、ではいきましようか」

そういつて足早に遊倉 瑞穂と蜜葉 流星は行ってしまった。

「流石、今日のイベントの指揮官よねえ」

「えっ？ 今日のイベントって2人が考えたんですか？」

「ええ、流星は無音の瑞穂は律灯の親友ですから見ぬに耐えないと言っわけよ」

くっくっくと邪悪な雰囲気をまき散らして黒夢も去って行った。

「どうしたのかな？ 奏ちゃん」

「……あ、いえなんでも僕達も行きましようか」
そういつて、僕も黒夢さんを追いかけた。

「むーくん、行くっか」

「あ、ああ」

無音は律灯に手を引かれ僕らと共に自由行動へと出発する。

半日後、というよりも午後7時過ぎ。

いよいよイベントが起こる少し前となった。

この場にいるのは、僕（奏）、黒夢である。
流星と瑞穂はそれぞれ2人を呼びに行っている。

ちなみにクラスのメンバーは後ろの林の中で隠れています。

さあ、結果はどうなるのか僕の運命をかけた大勝負。

なんかうまく閉めましたね。

T o B e C o n t i n u e

親から子へ

「で、結局の所どうなったんだい？」
少女はそういった。

「まあ、無事に成功したよ。失敗したら僕はここにいないって僕は笑いながら言った。

後日談かその後と言うべきなのか、よくわからないけど後日談としておこじ。

無事、父親は母親に告白をした。

あその後

その後、クラス中でお祝いをした。

もちろん僕も祝った。

修学旅行中にカップルになったと言う噂は瞬間に広がりその後、2人は色々な人に囁し立てられるのであった。

父親はこれから母親を護っていくと心に誓い、髪を黒に染め直し母親はこれから父親と進んで行くと言っていた。

僕が参加したのはそこまで

修学旅行が終わった後、消えるようになくなった。

もちろん、みんなの記憶には残っている。

最後の最後に僕らで写真を撮った。

それが、父親と母親の部屋に飾られていたと知るのはそう遠くない未来。

父親が18になり、卒業したことをきっかけにそのまま結婚、
2人は晴れてゴールインしたのであった。

父親は大手の会社にわずか21で社長となった凄い人だった。

どつりで家が広い訳だ。

父親が社長となる少し前に僕は生まれた。

名前の由来は僕と天翔が化けていた 青音 奏が由来で
音を弦で奏でる。

弦を結ぶというなんとも凄い偶然で付いた。

その3年後

今度は妹が生まれた。

僕は……いや、僕達はこのままその幸せがずっと続くと思った。
でも

現実はそう甘くない。

2人が27歳

僕が7歳

妹が4歳

ある日のことだった。

両親は買い物に行つてくると僕らを家に置いたまま

帰つてこなかった。

次に扉を開けたのはまだ7歳の僕では考えも付かなかった警察であり
2人は死んだと告げられた。

まだ4歳の妹は何が何だがわからぬまま動転し、3日間寝込んだ。

僕がすっかりしていないと、と考え僕は必死にこらえた。

それこそ妹の前では絶対に涙、弱気など見せぬように……

それ以来、僕は泣かなくなった。

その後は、あれだ。

両親の顔も声も形も年々薄れていって、もう妹も僕もいなくても平気になった。

僕は今年で高2 妹は中3となった。

もしかして、妹が僕に異常にかまってくるのは心のどこかで母親への愛を欲しがっているのかもしれない。

ごめんな

こんな兄で

そして、また

1人にしてしまつて。

「どうしたんだい？ 君」

「……いや、ちよつとな」

僕は我に返り、少女の話を聞いた。

「それにしても、君はなんとも凄いな」
「は？ なんで」

「いや、本来ならあの2人は修学旅行中に恋人にはならず、高校の卒業式になるんだよねえ」

「は？」

おい、ちよつと待て。

ならわざわざ僕が行かなくてもよかったんじゃ……………

「そう、君は忘れかけていた両親を思い出した。今回の旅行はそれが目的。」

どんなに時間が経ったとしてもけして、両親は忘れてはいけないよ」

少女の顔は真剣そのもの。

僕もそう思った。

何故、今まで忘れていたのか。

それが今分かった。

僕は両親を心のどこかで恨んでいたのだ。

僕と妹を置いて、先に逝ってしまった両親を。

でも、今度は妹に恨まれてしまいかもしれない。

それがどこか心痛い。

忘れられてしまいかもしれないし、

忘れられないかもしれない。

消えるかもしれないし、

心のどこかで覚えているかもしれない。

何年、何十年経ったとしても……

「そうか、ありがとな」

「いや、例には及ばないさ」

少女は無い胸を張った。

「で、次は何処に行くんだい？」

「そうだね」

少女は腕を組み考え出した。

思えば、僕は母と父だけではなくカオルの母と蜜葉さんの父親とまで会談していたなんて

けど………黒夢、黒瀬 夢時って人は初めて見た気がする。

何処か遠い所にも引越してしまったのだろうか？

数分後、少女は考えが付いたようで話してきた。

「ここに3枚の紙』まで、まで、まで、まで』なんでしょう?」

僕は少女が持っていた紙に対してツツコミを入れた。

「なんで僕の運命が紙に左右されないといけないんだ」

「いえ、特に意味は在りません。」
そういつて、紙を差し出してくる。

「む……」

僕は若干しかめっ面になりながらも、一番左の赤い紙を取った。

「おー、まさかこれですか。」

少女は驚いていた。

「何がだよ」

「いえ、よかったですねえ。また遊倉 カオルと蜜葉 英梨に会えますよお」

「へ? 何故に」

少女はむふふと笑って。

「次に行く時間軸は君が死んでから1ヶ月後の世界です。」

「本当か!？」

「私が嘘を言う人もとい……天使に見えますか？」

「バリバリ見える」

「酷いですうー」

シクシクとなく少女。

「わかった、嘘をつく天使には見えません (棒)」

「その(棒)じゃなかったら100点でしたのにい……」

「ってか、これって未来にも行けるのか？」

「ええ、未来に行けますよ。その気になれば世界の終りまで行くこ

とが出来ますが
逝ってみますか？」

「『逝く』じゃなくて『行く』だったら行ってやったのに……遠慮
しておくよ」

そうですか、と少女はいい。

「では、1ヶ月後の時間軸

7月5日に

逝ってらっしやい
」

僕はまだ、その『逝って』と言う意味を知らなかった。

ここから、僕の人生最大……恐らく、死よりも恐ろしい現実を味
わう事を

まだ知らない。

知りたくもない。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E

親から子へ（後書き）

次回はなに編なのでしょうかw

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262w/>

Changing the Future 未来を変える僕の物語

2011年10月21日01時59分発行